

ひらか 連携ニュース

地域医療連携室では、患者さん・ご家族がご自身の生き方を大切に、安心して地域で暮らしていただくため、地域医療・保健・福祉機関の多職種間と連携を図り、医療や介護を切れ目なくつなげるよう努めています。

今月は、当室で関わった患者さんのケースをご紹介します。

医療・介護をつなげるために

多職種との連携（在宅支援カンファレンス）

Aさん 80代 男性

平成28年4月、在宅医より、訪問診療のため当院から紹介となった胸部大動脈瘤の患者さんのカンファレンスの依頼を受けました。これまで外来患者さんのカンファレンスは担当していませんでしたが、家族との合意形成や緊急時の対応の確認のため、連携室で調整役を引き受けました。

カンファレンスへは、主治医、在宅医、ケアマネ、病棟・訪問看護師、ご家族等、9名が参加。奥様からは、認知症のため安静度を理解できない患者さんに対して、「じいさんの好きなようにさせてあげたい。」との希望があり、Aさんにストレスを与えないような関わり方や、介護サービスを利用する際の留意点、血圧等、病状が変化した際の連絡方法等を検討しました。カンファレンスによって、問題や対応策を共有しあい、家族、在宅スタッフともに、安心して在宅療養へ移行することができました。



かかりつけ医との連携（オープンベッド）

Bさん 80代 男性

平成28年4月、間質性肺炎と糖尿病の悪化のため入院されたBさんのもとへ、かかりつけ医のD先生がオープンベッドの回診にみえました。「おお、先生！来てくれたのが。ありがでなあ。」とBさんの笑顔が印象的でした。回診後、当院の担当医とD先生で、退院後のインシュリン療法について、検討が行われました。D先生より「息子さんと二人暮らしであり、日中は独居の状態。内服薬のコンプライアンスが悪く、インシュリンの管理はリスクが高いだろう。以前、服薬や食事の支援のため、介護ヘルパーに来てもらったことがあるが、自分のペースがあり、本人の協力を得ることが難しかった。」と説明がありました。担当医より、「自分が収集できていなかった情報、大変参考になりました。」とお話があり、今後、Bさんの思いや生活環境にあった治療方法や介護サービスについて、ご家族とともに検討する方針となりました。



緩和ケア認定看護師との連携（他病院への受診申込）

Cさん 40代 男性

平成28年4月、緩和ケア認定看護師より、がんのターミナル期にあるCさんについて、他病院の緩和ケア外来の受診に関する相談を受けました。Cさんは、がん性疼痛による身体的苦痛の他、仕事のことやご家族への思いなど、さまざまな苦悩を抱えており、そばでサポートする奥様も不安が強くなっていました。早速、他病院の連携室と予約日の調整を図りました。認定看護師の配慮により、主治医の診療情報提供書に加え、緩和ケアチームの支援経過について、事前に情報提供ができ、その結果、早期転院が実現しました。転院後、他病院の緩和ケアチームより、「認定看護師のサマリーにより、疼痛の評価やスピリチュアルペインの把握をスムーズに行うことができ、速やかに疼痛コントロールが図れました。Cさんは、精神的にも落ち着き、ご家族と穏やかな時間を過ごしています。」との連絡が届きました。

